

運命の星さだめ  
(DV24年)

一 青葉蝕むノイローゼ  
いじめいじめの気紛れに  
この身の破滅 筆とりて  
生きてくさまのつくづくと  
忍の力も尽き果てる  
人の飛礫も重すぎて

二 拝みやさまが魔を払い  
護符を渡してかくかくと  
教え下さり身も軽く  
この世の神と手を合わせ  
亡きにし命 拾いつつ  
宵春の名残の別離なる

三 結びし甘い縁神  
恋の氏神 時の神  
喜び過ぎて目を開けば  
またも悪魔に魅入られて  
若さは一途 突き進み  
自ら命止めようと

四 愛は悪魔の甘い罠  
日にも経ずに叩かれて  
頭に瘤をつくる日々  
脆い諸刃の剣のなか  
夫の暴力異常にて  
生きてるままに死している

五 この一撃は身を砕き

心の弁は幕を閉じ

闇夜の嵐 吹き荒ぶ

地獄の拳 コツコツと

頭に受けて脳針は

怯えて震え虫の息

六 二十四年の歳月を

いじめいじめの結婚に

精根尽きて離婚する

よろめき歩き去りて行く

そんな私に手を貸して

藁にも縋る気持ちなの

七 運命の星に見離され

悪循環の渦のなか

酒乱の鬼に絡まれて

生活のリズムままならず

追われ追われてあてもなく

この世の何処も針むしろ

八 もしも私が永らえて

命を繋ぐことあらば

自分の伝記 筆とりて

後世人に伝えゆき

初心の望み貫いて

形見に遺す物語

ひたむきな月

(一)

苦しみをいっきに吐く少年のように  
貴方はひたむきに  
私の心へ向かって走ってきた

私の心の琴線をゆるやかに  
心地いいリズムにのせて  
海のようにたゆたう  
あたかも恋する縁  
愛の花にも都のあることを

私の文学という「月」は  
水に映っているのだけれど  
手にとることはできない  
幼くして懸けた私の夢は  
遠い夢だったのだ  
あなたの恋は私の文学に  
火を放ったのだ

七難即滅だった私の人生に  
七福即生さて災い転じて福と為せるか

まだ恋の準備心の準備が整う前へ  
ぎんぎんに燃えた貴方は長野から  
香りのいい花籠を抱いて名古屋駅頭に立った

フランス人でもない二人は感極まって  
抱擁<sup>ハグ</sup>するでもなく

ホテルの部屋で二人きりに  
差し出す花籠を私はテーブルに置き  
椅子から立ち貴方の傍までゆき

いきなり頬にペーゼを贈った

高校教諭だった正彦その職業に  
ありがちな高校生のようないでたち  
静寂の中 交わした数々の手紙  
二人は精一杯素敵な手紙を書いた

(二)

ひとつの言葉を抱くということは  
ものの頂を走りながら  
ものの底辺を歩みゆくことでもある  
頂上伝いに走りながら私は底辺を  
歩んでもいる 同時に最高所と最深部をも知っている 愛、悲しみ希望、  
どんな言葉でもいい ひとつの言葉を抱いて生きる時矛盾した二つの場所を同時に経験  
することになる

僕も由美子さまの心の花(文学)が大輪に咲く肥料として喜んで許す限り身も心も捧げまし  
よう

僕も貴女さまの生きた証になれますよう残りの人生を努力させてみて下さい そうするこ  
とによって僕の人生がどのように花開くのか挑戦してみたいからです正彦は書いた

そぞろ歩きのためむれに書いてわかし思い出よああ花の笑顔もやさしく浮かびわれを泣  
かせるうたのふし

こんな調子の二人でした矢張り冬に向かう由美子さんと言えども恋が一番の天国です  
フロイトさえいごには「人間の中心におくものは愛し愛されること」うまいこと言ったも  
のです由美子もそう信じます

恋は何もかも終わった時点から出発する  
憎しみを肥やしにしても花を咲かせてしまうという皮肉さをもっているからだ  
熟年同士が心を裸にして向き合えた瞬間は例の文通からだった

人間らしくないかけ離れた交流は相手を一番苦しめてしまうからだ

大事なことは「正彦さまの誠実さと由美子の誠実さがどれくらいきちんと向き合えたか」  
生々しくても人間として生きることのほうが余程素晴らしいのだ矢面に立たされるのはい  
つも女であってはいけない

(三)

ふたりがもつと老いて性別を乗り越えたとき駆け引きのない純粹な愛情は見えてくるだろ  
う 人間が人間に対する哀れみや思いやり そして弱い者同士は他人でも力になりあう  
そんな高齢化時代は目の前にきている  
たった一度の出会いにこんなに想いをかけられてとても幸せです

正彦という停年 バブルがはじけとんだ母の病気 教諭以外なにかしていて倒産 金銭の  
めどもつかないのに母の介護に必要な経費は正彦を追い詰めてくる逃げ場はない  
逃げ場所とした私は人生の収穫どき。出版本二冊 ヨーロッパ人権の旅へ 新聞社へ出社お  
手伝い どうしてこんなにペンの滑りがいいのかわくらくでも書ける 塞ぎ止めていたも  
のが奔流のようにとけだしていく

邂逅によって七難は即滅していき七福即生に転じたのに正彦は即滅の憂き目 定年退職で  
なく自ら停年退職と理解するには私は多忙すぎた。ペースが合わなくなりかけていた

当時タイムカプセル流行 私は二二世紀公募へ応募する 正彦との想いを書き記し私たち  
の恋は二一年までカプセルの中にいる

詠って認めてゆきたい私の価値観は茨の山坂を越えて理想の山嶺を目指す

立ち直った正彦と恋のながてを幾重にも繰り返し絵巻物に束ねて掲げる夢 夢でもいい私  
の願い

私がいつかはという羅針盤に向かって歩いてる限り私の燃やしたこの月は私の胸に包容  
できるのだろう

1994年記